

研究通信

No. 42

1962・4 刊
研究会局
社会事務研究室
丁教育
市片平学
台北東
社会研究
大学社会
仙台

十周年大会の年をむかえて

竹内利美

「十年一昔」というが、村落社会研究会も、発足以来ちょうど十年になり、年報の発刊も、九冊を数えるまでになつた。その間、会勢は飛躍的に発展したとは、いいえないと現状であるが、まずは「細く長く」、ともかく年々一回の定期もなく、今日までつづいたことにとは、御同慶の至りといわねばなるまい。仙台に社会学大会がひらくされたのを機に、この会は発足した。そして、学会終了の翌日という悪条件のもと、準備万端全く不行届きのなかでおこなわれたオ一回大会であつたにもかかわらず、開会の辞もぬきに始まりの汽車時刻追るもの忘れて、談論風発、何時果てるとも思えなかつたあの夕刻懇親のひとときが、今さらのように、なつかしく想起されるのである。たまたま、事務局を再建、東北大学でおひきうけすることになり、また、十周年の大会も、提出しに戻つた。仙台で今秋ひらかれたことにきつた。発今当時、大会開催の番頭役をつとめた私たちには、とりわけ、感慨深いものがあるわけだ。しかし、今はそうした回顧に低迷していくよい段階ではなく、むしろ、会創設の眞実にちひえり、卒業に十二年の足どりを反省して、いささか停滞気味の現状を、打開する途を見出すよう、おたがいに努力すべきではある

まいふと思われる。

「日本部落の研究」という共通の研究対象を持ちながら、それそれに専門の立場を異にし、したがつて分析の視角にもくいちがいのある研究者たちが、率直におたがいの成果を披露し合い、討議をふされ、よい刺激を与えたとえられる。つまりは、なごやかな雰囲気のうちにも、きびしい学的態度を堅持した、おたがいの研究水準を高めるに役立つよい学的交流の場をつくりだそうというのが、今発足の一つの理由であつたようと思う。もちろん、そのままで、社会学の研究者が当初から比較的多く、そのため会運営の面でも、いわば進歩的な役割を果す人々が、社会学関係のよう、偏がちがつたことも、事実である。しかし、そうした発展の當時事情が、十年間いたいそのままの形でひきつがれ、すくなくとも、ひろく地域領域の研究者を、次々に包含するという方向には、伸びていたみつたことは、一つの問題であると言わざるをえない。とくに、社会学以外の領域で殆んど新進気鋭の人々を、ひろく仲間に呼び集めえたなかつたことは、心残りであつた。さらにいえば、金銭的にみて、意外に新しい会員獲得が不活発で、会員の開拓性が、ここ数年、とりわけ目立つてもきた。「細く長く」ともかくつづいた理由が、妻はこうした傾向じみの仲間のなどやかな人間関係に支えられていた点に、かかつていいたことは認めざるを得ないが、いつまでもこのままでは、末通りのあそれが充分にあるまい。年一回の大会にもちだされる課題のとり方やその扱い方にも、いささかマンネリズムのきらいがあるようで、たとえば、現状分析一辺倒といつた傾向なども、多分に反省されてよいのではないか。年報統刊も難關にあつてゐるが、それは別としても、編集内容などにも、もつとおたがいに注文を出し合つて、新しい方向をさがしてみたいものである。

まだ事務局のひきつきも、十分済んでいない段階で、とりあえずこの過橋を編んだので、万事ゆきどかぬ点だけであるし、また、秋の大会の件も方についても、具体的な相談をするところまではい

つていいをいゝ。それらについては何れ次第でお
知らせしたいが、どうか十年間の反省にもと
づく余所の意見のない御意見御感想を、
おしえてお寄せねがいたい。次の通信では、
それをもとにして、村岡の今後のあり方をめ
ぐる問題特集のようなものを、編集して御届
けしたいと考えている。事務局と大会当番を
仰せつかつたものとして、以上のような要望
をして、まずは御検討にかかる次第である。